

# 彩の合気

編集発行  
埼玉県合気道連盟

埼玉県合気道連盟機関誌 NO. 26

## 「武道の活用と武道館の意義」

合気道 和光支部 笈川元枝

昨年の9月、和光市体育協会理事会にて突如耐震性に問題があるため武道館が取り壊されると市議会で決まったと言渡された。しかも11月までしか利用できないとのこと。

師範はじめ支部員そして他の武道館利用者達は寝耳に水！！しかもその理事会があったのが木曜日、市長への一般意見陳述受付は休み明けの月曜までである。成す術が無い！

誰もが驚きたじろいでいる中、電光石火の神業で市長への「武道館利用継続願」なる嘆願書を他団体の署名も頂いてわずか3日で作りあげた川路師範、見事に意見陳述受付期限に間に合わせた。

師範の迅速なる行動が功を奏し、市長への直訴にまで発展。しかも事前連絡が何もないことを諫めるために役所のスポーツ課に紋付袴姿で参上し課長を一喝！！その瞬間 そのフロア全体がシーンと静まり返った。職員全員が恐縮した。

川路師範 恐るべし！

まさに今、頭上に振りかざされた白刃…驚いたって間に合わない(佐々木将人語)ならば如何する、かだ。その武道の真髄を畳の上の稽古だけでなく実社会においてもかくあるべきと実践してみせた師範。そんな師範が言った記憶に残る言葉が一つ。

「大や小は便所でするんだ。風呂場ではない！」

これは武道館を取り壊しても体育館があるんだから…との役所の考えに対するもの。

まさに言い得て妙、そうなんだ、そうなんだ！身体を鍛えるスポーツと精神を錬る武道は同じではない。それぞれ意味のあるものでそれぞれが違うもの。

ならばやはり武道は武道館でおこなうべきである。それによって我々が普段稽古している合気道が単なる身体の運動で終わらず武道へと昇華し、武道家として日本人として、の意識を知らずしらずに身に付けさせてくれる。それこそがことごとく形に意味を含ませる日本の文化の求めるところであるのだから。

降って沸いた様な武道館取り壊し問題から早10ヶ月、この7月に耐震強度及び補強工事費用の見積

もり等の審査を終え今はその結果により下される判断を待つところである。



草加合気道研究会 橋本行枝

当会は、年長組の子供から74歳の方まで、現在は、約40人が稽古に励んでいます。会が発足してからかれこれ15年になります。残念ながら、苛めに近い厳しさ？体育会系の当時20代後半の白帯の男性が初心者の子供の女の子を四方投げで腕をひねり泣かせたり、色々あり、初期メンバーは全員辞めてしまいました。開祖のおっしゃった合気道は愛じゃ、合気道の技だけでなく、和が大切、と理解しないで自己中で井の中の蛙の人は、和を乱し困ったものです。

発足当時は谷塚駅——東武伊勢佐木線——から徒歩10分の草加記念体育館という立派な体育館の柔道場をお借り出来たのですが、現在は、草加駅徒歩5分の中央公民館二階の柔道場で、週二回、草加中学校で週一回、稽古しています。週三回で月謝は2000円、家族は何人でも3000円です。会費の安さ、稽古場所が駅から近い場所になった事もあり、遠くは春日部からも来ている会員もいますし、カルチャーセンターから移った会員もいます。この4月からは、親子4組一父と娘、母と息子2組、母と娘一の会員が増えました。この2、3年は初段、二段まで続いた方達が増え、また70歳で入門した男性が、今年初段に合格し、感無量です。

昨年からは、5月に独協大学での国際交流フェス

ティバルで、合気道紹介をしています。私が元気でいられるのは合気道のお陰！と日頃思っていますし、合気道大好き人間ですので、合気道の和一輪がひろがる事は本当に嬉しく思っています。

埼玉県には、以前調布合気道連盟会長でいらした現在90歳で現役の大谷先生がご指導なさっています。皆で大谷先生目標！と言っておりますが、なるべく大谷先生に近づけるよう精進したいと思っておりますので、皆様のご指導ご鞭撻宜しくお願いいたします。



白岡合気会 小林裕一

町の合気道講習会に参加したことがきっかけとなり、白岡合気会はスタートしました。初心者が集まりの中、子ども達も一緒に稽古をします。ミーティングルーム兼軽体育室に25枚の畳を並べての稽古でした。少しずつ仲間が増え、畳が増え、昇級ごとに一緒に喜びを分け合ってきました。このことが、会員の固い結びとなって、一時は危ぶまれた存続の危機も、「合気道を続けたい」という思いになり、今日があるのだと思っています。

27名の会員のうち、7組18名が親子という構成です。自分の稽古もしたいし、子ども達のことでも放置しておくわけにはいかないし。毎日毎日が試行錯誤の繰り返しです。

礼、立ち、座り、あいさつ、武道に対する姿勢等々、未就学児から中学生までいる中で、どう教え、どう理解させるか。その難しさに悩みながらの稽古です。大人の経験を積んだ者同士でさえ、相手との気を合わせる事がいかに難しいか。気を合わせているのではなく、合わせている気になっていることにもなかなか気付きません。そのような状況ですから、子どもと気を合わせる事がいかに難しいか。体格の差を言い訳に気を合わせているつもりになってしまいます。

そうした中で得られた全日本少年少女武道錬成大会への出場の機会。正に感無量、この日を迎えることができたのだという思いで一杯でした。稽古を始めた頃は、日本武道館での演武大会の話聞いても、

全く遠いこととして聞いていました。でもそれが、本当になったのですから。

不安を抱える大人以上に緊張を感じる子ども達、ただひたすらに演武するその姿に思わずジーンときたのは、単なる親ばかなのでしょうか。今日まで、様々な形で支えてくださった皆様に感謝の念が絶えません。これまでの結びを大切にしながら、今までの以上の、そして次の結びを求めて会が続けばと願うばかりです。



道場には、技のスキル以外の学びがあると思う

浦和合気会 小川雅史

ことさら誰かに自分自身の合気道観はああであるこうであると、人前で表すことがなかったもので、このような場を頂くと、少々のプレッシャーと気恥ずかしさがあります。それは、合気道というものに対し、人それぞれ各人が各様の思いや観点を持っていることを、私が少なからず承知しているからかも知れません。私にはまだ合気道の精神や術理の深淵が見えるわけでもなく、けれども、この合気道の道場というコミュニティーに身を置いて稽古をすることの価値を確かに感じています。

・道場では、実は当たり前のように良く気づかされる

なんのことだと思われるかもしれませんが、私の場合は、そういうことが何度もあったように思えます。いざとなればこれくらいできる、そんな思い上がり、実は自分の足を引っ張るだけの足枷でしかない(少しくらいの思い上がり、必要なときはあるけれど)ことであるとか、気づかされるのは、実に当たり前なことが多いです。私は男性である程度腕力があるからと、技の巧妙を学ぶべきときでも、上手いかなければ腕力で、などと無意識下では不届きなことを思っており、技の拙さを知らず知らず腕力で誤魔化していたこともあったように思います。より悪い時には、技が効かないことを、どこかで相手のせいにして(本文を読まれている御仁はそんな経験はないかもしれませんが)心がざわついてしまったり、それはもう日常の心のありようの縮図とい

った感すらあって、振り返ると恥ずかしいものなのです。稽古を続けていると、そのうちこういった自身の思い上がりや、心のちょっとしたざわつきに、自然と気付けるようになってきたように思います。

他にも、一見当たり前で、けれども実行は易くないことが、道場での気づきには結構多いのです。

素直に教えを聞く、やってみる。当たり前のことの繰返しが上達の基本であるとか。その道の自分より優れた者を知って、努力の差、才能の差を思い知ることが自分を正しく知るためには大切であるとか。道場にはそういう気づきの目印がいくつもあ

る。そういうことに良く気付かされるのは、この道場の良いところ。でも良く気付かされるのは、良く忘れているからなのでしょう。

・合気道で学ぶ心のありようは、道場の外にあって生きる

ガンとぶつからないように。社会人初めの赴任地が仙台になることから、私が学生時代からお世話になったこの道場を去ることがきまった頃、道場の先輩（合気道を始めたのは私の方が大分先だったが、社会人としては大先輩）にもらったメールにこんな内容があった。

「これから色々なこと色々な人に出会うだろう。理不尽なこともあるだろう。でもそんなときはガンとぶつからず、ふっと気持ちを落ち着けて、柔らかな気持ちで対処してほしい。合気道を生かして。」もう3年以上前のことでしたが、確かそういった内容でした。道場の人から、合気道の技以外でこういった言葉がもらえること、今時の若者としては得難い財産だと思います。



武道は道だと、そう言うと、なんともとらえどころがなく漠然としていて、これという具体のモノを見出すのは難しい気がします。

けれども、道場の方が、合気道のありように準えて社会人としてのありようを教えてくれたことは、多分道の一つです。そう勝手に思っています。

そんなことがあるのも、この町道場のお勧めできるところなのです。こういう場所があるなら、それがどこであってもちよくちよく顔をだしていきたい。そういうわけで、転勤族の私は休会すれど退会せずでこれからも行こうと決めています。

## 救急救命講習会

久喜合気道同好会 小坂恭子

久喜合気道同好会では、希望者14名が救急救命講習を受けました。久喜地区消防組合消防本部から指導に来て頂き、6月27日、日曜の朝稽古の終わった午後、暑い稽古場で熱い実演講習を行いました。

「負傷者発見」から「意識の確認」「心肺蘇生法」そして「AED（自動体外式除細動器）使用」までの一連の流れを、照れながらも真剣に行いました。

初めての「人工呼吸」に軌道を塞いでしまい空気が入らなかつたり、「胸骨圧迫」の正しい場所や、圧力の入れ具合や深さが分からず、人形相手に四苦八苦しました。ですが、もし本当に現場に居合わせた場合、「ビデオを見たことがある」と、人形でも行為を「実際に体験した」とでは、役立ち方が違うと思います。

現在AEDは3メーカーから出されていますが、誰でも使えるように音声指導と貼る場所が分かりやすくイラスト化されています。実際にAEDが使用されない方が良いに決まっていますが、自分が使用する場面に居合わせたらと、参加者全員が真剣でした。止血法を最後に教えて頂き、全員が「普通救命講習修了証」を頂き2時間半の講習が終了しました。

これから夏を迎え、水の事故も増えます。何より合気道の稽古中にも熱中症で倒れる人がいるかもしれません。冬場の稽古で倒れたという話も聞きます。医療処置を行う資格が無い私達でも、今はAEDを使用することができ蘇生率も上がっています。今回の講習のように落ち着いて行動が取れるか分かりませんが、万が一の時、目の前の命を救えるのであれば、ちょっとした勇気と行動を持って私達は手助けをしたと思います。



### 第25回埼玉県合気道連盟少年錬成会に参加して

合気道健武館 早野真由美

4月も半ばを過ぎたというのに、雪が降ったり、初夏のように暑くなったり気候の変化が激しい今年。幸いなことに錬成会当日は、丁度良いお天気で気持ちも体ものびのびして、参加できました。

200名以上の子供達が集まって、それぞれの力を大勢の前で披露し最後まで演武する姿は、とても立派に見えました。それぞれ指導して下さる先生のお話をよく聞いて、普段の稽古を頑張っているのだろうということがよく分かりました。そして合気道は、技だけではなく気持ちの面もしっかり培うことのできる武道で、挨拶もしっかり浸透していて感心しました。「礼に始まり、礼に終わる」しっかりできるといい気持ちになり、次の意欲へと繋がります。

全体練習の時も誰1人無駄なおしゃべりをせず、先生をよく見て、言葉をよく聞いて、そしてすぐにその動きが出来るということは、大変素晴らしいと思いました。ただ、他の道場の子と組むというのは少し気恥ずかしいのか、普段稽古出来ないお友達とももう少し積極的に稽古できたらいいのにと思いました。誰とでも仲良く分かっている、行動を起こすことは、やはり相当の勇気がいるのでしょうか？私も含め、皆が稽古を通してまだまだ学んでいく課題の1つです。

錬成会で学んだことを生かすことが出来るよう、しっかりと自分の目標を持って、また1年後、子供達と共に成長し、道場にたてることを楽しみに日々の稽古に精進していきたいと思えます。楽しい1日でした。



### 少年部後援会の活動と中原賞の受賞

入間幸武館道場

少年部後援会長 宮寺邦男

入間幸武館道場は入間市根岸の広大な茶畑の中にあります。少年部は毎週日曜日朝8:30~9:30の1時間、小学校1年生から中学校3年生まで総勢26人で、少年部師範の成田先生のご指導のもと、明るく、楽しく元気に稽古に励んでいます。

少年部後援会のこの5年間の主な活動としては、正月の稽古始めに「餅つき大会」を2回、最近「ゲームや福袋の配布」等を行い、春の少年錬成会、夏の武道館への引率、夏休みには合宿を1回、その後は毎年大人の部の先生方や保護者も参加して「カレーパーティ」を開き、ゲームやレクリエーションなどを行っています。

また昇級試験前には試験の技の紹介をメールで送ったり、合気道の本の貸し出しをして保護者の方々の理解や応援をいただくよう支援しています。こうした活動を通して子供たちと保護者、大人の部の先生方とも一緒に親睦を深めることができました。

特に保護者同士が仲良くなり「また合宿をやろうか」「バザーをやろう」「もっと何か活動しよう」等家族的な雰囲気ができあがり、本年度は「子供たちが稽古の時にもっと誰とでも積極的に組むことができるようにしたい」と言う声があがり、日曜日の稽古の後体育館を借り、半日使って集団ゲームに取り組みました。

実はこのような私の後援会長としての活動の大半は「内助の功」があつてのことでした。入間市には「中原賞」という、スポーツや武道に対する「内助の功」を評価するすばらしい賞があり、関戸師範や先生方のご推薦をいただき家内が受賞させていただきました。このような賞をいただくことは身に余ることと恐縮の限りですが、これを励みに今後も幸武館の発展に少しでも貢献できれば幸いです。



### 入間幸武館道場 松長佳正

合気道は動く禅ともいわれ海外でも普及しつつあります。合気会本部の師範の方々による海外巡回指導ツアー、個人で海外に居を構え指導されている師範の方々により、多くの外国人に親しまれています。また、国際交流機構（JICA）からも海外青年協力隊員、シニア海外ボランティアも合気道指導員として派遣されています。

私もその一員として平成20年4月から22年3月までの2年間はエルサルバドル国、国家警察学校の指導員として派遣され主として学生に体術（武道、射撃、体育など）を教える教官を対象に合気道の指導をいたしました。体術の教官は10数名おりますが特に武道を教える教官に指導し、また警察官候補生にも指導してほしいとのことで学生にも指導しました。

中南米は一部の富豪が富を独占して大多数は貧困であることや産業に乏しいことなどもあって犯罪の多い地域ですが当国でもとても犯罪が多く、中上流の住居は鉄の門と電流バラ線でもまるで要塞のようです。銀行、ホテル、レストラン、商店など銃を持った警備員が入口にいます。銀行は特に警戒が厳しく入るには荷物チェックやボディチェックされるところもあります。スーパーなどでは荷物を預けて手ぶらで入らなくてはなりません。

山に行けば山賊、海には海賊、街には強盗・すり・置き引きなど単独で人通りの少ないところに行くことは大変危険です。また、麻薬関連の犯罪も多発し新聞には毎日のように犯罪者の写真が載っています。

もちろん昼間や街中では安全ですが、日が暮れると屋台はすべて店を閉じ、人通りもなくなり移動はすべて車で、バスも9時ごろが最終です。

国としても犯罪防止に力を入れ、警察官には様々な体術、技能を取り入れています。法律により犯罪者を極力怪我をさせないで逮捕せねばならず、その点からも合気道を取り入れたいとの考えがあったということです。

道場が2面しかなく、各教官が学生を指導するためほとんどの時間が埋まっているので、その間をぬって参加出来る教官の指導は毎日1時間から2時間程度、後は教官の授業の時一緒に学生を教えるという形で指導しました。学生は1000人ぐらいいるのですべてのはできませんでしたが、教官が希望するときはいつでもいっしょに行いました。20歳前後の青年ですから活気があって楽しく活動出来ました。

みんなとても陽気で訓練というよりは高校生の体育の授業みたいにワイワイ言いながら技を掛け合っていました。第一教の裏など力を使わず技でうまく相手を倒すことができたりすると、歓声をあげて喜んでました。彼らは一年間余りの訓練を経て全国に

配属されます。街で思いがけない時に「マエストロ」（先生）と声をかけられたりすることもありました。

その他、市民からの要望もあり週3回夜間おおくの人たちと一緒に稽古に励みました。社会人対象なので人数に多少はあったがどの会場でも常に10名前後を対象に重ね段位まではいきませんでした。中上級の技を身につけるまでには指導でき、その様子を現地の日刊紙にとりあげられタクシーの運転手からも見たよといわれたりして、少しは国際交流に役立てられたかなと思っています。



### 私と合気道

桶川合気会 姫野忠正

桶川合気会も例年の日本武道館の演武会へ出場、平成20年には会の30周年記念演武会を盛大に挙行した。当初子連れで稽古、子供達は中学で部活、残ったのは親達。今もそれは伝統である。未知とのすばらしい遭遇から数年、級を取り段を目指し暑さ寒さも反骨精神で稽古。我々の師、石川宏師範は開祖の下でその鉄板の様に固い肩を揉み直接声を聞いた人。技の中心として「転換」を探求し、いなし、くずし、さばきへ多才で、その説明を縷々受けるが頑迷な頭には体現が困難。されど次々と湧き出す技に毎回魅せられて習う喜びと楽しさは尽きない。

今私は年金生活、家の中に留まれば生きるに事欠かないが刺激がない。月数回嘗ての会社の仕事に赴き、会社の実情、社会の流れを知り刺激を受ける。また世の中に役立つことを考えれば、長年の未熟ながらの合気道がある。これを人々に伝えれば日頃の健康作りと合気道の大きな目標、世界平和にもなる。武は愛なりなのだ。あまり体力も無理も利かなくなったが、毎朝の運動が日課である。近くの大きな公園で準備運動、杖木剣の振り、徒手の動きで30分、あと30分丘陵地帯の木立で木剣を振り回し、汗をかき、腹はへり、疲れも少々感じて朝食に帰る。何を食べても旨い。全身を柔らかく関節と筋への刺激、筋肉のストレッチ、複式呼吸、血圧は下がり血行は良好。習慣病を避ける心がけて、健康で長生きは間違いない。多くの人々と稽古に励み語り、その良

さを分ちあいたい。平成21年は世界の金融危機で先行きは不安。だが物は満ち溢れている。物のなかつた60数年前の戦中戦後を振り返れば、慌ただしく物質文明に追われる事もない。暫し隠忍。人々の持つ能力、可能性は将来に向かって充分に対応、発揮できるものと信じる。でも今後を生き抜くには、特に若者にとって最大の武器は健康。頭を磨き心身を鍛え合気道を日常生活に生かして戴きたい。

## 追悼 黒岩洋志雄先生

### 格闘技術としての合気道

平成22年 新盆

合気道猿田彦道場  
渡邊曙光記

去る5月19日『楷書のこころ』と題した講習会を催し、『草書より楷書へ』という本来と逆プロセスで基本技に戻る稽古状況や様々な団体より駆けつけた高段者達のやる気充分な姿勢などについて述べようと思い、ペンを取ってみたが、他にどうしても脳裏に細波の如く打ち寄せて来る何かがある。そのぼんやりとした心の動揺を辿っていくとそこにひとりの人物が浮かび上がり、どの時かにはっきりとしたかたちが現れた。それは先日亡くなった合気道界の異端児・黒岩洋志雄師範である。何か言いたい、伝えたい、そんな表情に見えてくる。おそらくこの紙面を借りて発言されたいに違いない。心を平坦にして集中すれば、諸々は声に近いものとして認識できるであろう。一瞬が一生で一瞬もまた一瞬であるかのような黒岩師範の生き様、合気道に懸ける情熱、ほとんど表裏のない実なる一本道、自分自身に忠実であろうとする時に生ずる孤独な戦い、信念を貫かんとする時、同時発生する否なるざわめき、はたまた妨害、等々、「とかく人間界とは厄介なものだけど何が本当で何が虚飾であるか、しかと見極めるべきだと思いますよ・・・。」という声が聞こえる。20数年に亘る黒岩師範とのコミュニケーションが時を超えて断片的にフラッシュバックし、どうやら自動聴聞モードになったらしい。「ボクはね肺癌の検査はいつも異常なかったんですよ。当時はね肺気腫というのがあったなんて知らなかったんですよ。だからずっと煙草は吸ってました。しょうがないですよ自分が悪いんだから・・・でも慢心という病にかかっている人、結構多いですよ。現実理想に反して茨の道です。どちらかという醜い戦いの場です。合気の技も虚実をはっきりしてもらいたい。現実には相手が予定通り手を取りに来てくれますか？途中で離しちゃうかも知れませんよ。あなたも経験したことあるでしょ、初心者に四方投げをかけた時にクルッと回

られたこと。だから必ず頭をつけていかなくちや、相手がずっとついてくるなんてことはないんですよ。だからこちらは時として自らが取りに行き、こっちから技をかけにいかなくちややられちゃいますよ。ローキックなんか特に恐いですよ・・・ボクは『合気道を格闘技』として考えてやってきたんだけど・・・世間の人々が『平和ダンス』を求めているのならそれはそれで致し方ないですね。ボクはやりたいようにやって、言いたい事を言ってきたので、こんなもんかということで悔いはないです。でもね合気道の未来においては実8、虚2の割合でやるべきだと思いますよ。」果てることなく伝言が行き交い、頭中、心中を忙しく駆け巡るが回り灯籠の行先はもとの場所である。とどの詰まり、黒岩イズムは何10年も前から貫しており、死んでもなおその方針、態度がブレることがない。

昭和30年代の本部道場では一般稽古の後、有志が集まり、技の研究に余念がなかったと聞く。そしていつしか人々はその時間に行われるその稽古を『クロイワスクール』と呼ぶようになった。そんなロマンを含めて、1995年に旧猿田彦道場において講習会『クロイワスクール』を催したことがあるが、今まさにそれが昨日のここのように甦る。「対者から離れないで密着していった方が良いですよ。中心軸を変えずに内へ内へと入っていくんです。腰投げは撥ね上げるんじゃなく擦り抜けるんですよ。」モットーを潔癖であるべきというポイントに置くと必然的にリスクを伴うと考えられるが、一徹人としての黒岩先生はあの世でどのような評価を受けているであろうか？もう一度耳を澄ましてみると何かひとつ変化したような空気を感ずる。やがてそれは言葉となり、木霊となり、遠くに消えていった。

「人間は少しチャランポランな方が良いのかもしれないね。ボクにはできなかつたけど・・・」と。近代の古武士であった『合気勇道居士（ゴウキユウドウゴジ）の警鐘』はこれからも時折我々を生々しい現実の舞台に連れ出して、促すように鳴り響くに違いない。

